抱かれて海は入江となりにけり春は石蕚（あおさ）のははのふるさと　宇都宮とよ

東京歌会で高点を得た作。題は「抱く」。「抱く」という語がじつにうまく使われている。歌会では、上句の入江をとらえる大きな表現に注目が集まった。しかしそれだけではない。下句もいい。波が寄せ返す磯の岩々についたアオサの濡れた緑が印象的である。

妖艶な部分を内に包みつつ身をよこたえている柏餅　武藤義哉

柏餅の存在感をうたって「妖艶な」という形容詞の意外性がポイント。柏餅を存在感で表現しようとしたアイデアが卓抜。ただ、一首中で「妖艶な」が目立ちすぎる、という見方も当然あるだろう。

トンネルに入ると窓にうつりたる人眠りをりピアスのゆれて　若林卓宣

トンネルに入って、はじめてその人物に注意が行ったのである。それまでは、ぼんやり窓の外を見ていたのだろう。急に女性の顔が視野に出現した小さなドラマ。日常生活の何でもない場面に取材して、小さなドラマをとらえて見せた手腕。

かげろうの父、影法師の母ばかり殖えて家族の核がこわれる　久保富紀子

「核家族」という語が話題になったのは一九六〇年代の終わりだった。昭和で言えば四十年代の初め。それから五十年。この五十年間に「夫婦」「父」「母」はそれぞれに変質した。われわれが自分を生きるのに一生懸命になりすぎて、社会的な役割を生きることに不熱心だったからである。上句の批評性に注目した。こういう社会性のある作がもっと出てきてほしい。

短歌の現在

No.390　今月の15首を読む

佐佐木幸綱

朝焼けはレモンを弾く音がするふたりの恋は始まったばかり　木下美樹枝

ストレートでシンプルなよさがそのまま通用するのは恋歌の特権。これだけストレートな表現は、近年はめずらしい。一読、高校生の短歌かと思ったぐらいだ。作れるうちに恋歌をたくさん作ってほしい。

一面にネモフィラの咲く見晴らしの丘一帯が空に熔けたり　小澤俊夫

「ネモフィラ」という花を私は知らなかった。ネットで検索したところ、ひたちなか市の「ひたち海浜公園」の映像があった。なんと四百五十万本の花があるそうで、五月上旬が見ごろだという。まさに空にとけこんでいるような映像だったので、ついここに選びたくなった。「熔けたり」は「溶けたり」がいい。作者には何か特別な意図があるのだろうか。

池と沼の姓ある人を知りをれど沼には底の知れぬものある　大橋伸宏

現実の沼がそうであるように、姓に「沼」の字がある人は底がしれないところがある、というのである。有名人では田沼意次しか思い浮かばないが、調べてみると「沼」のつく性は何百もある。現実は措いて、個人の視